

§14 アンドリュウ

今からちよつとその場面を紹介しますが、印象的なのはアンドリュウはまだ十六歳の少年なのですが、もしかしたら自分は将来海外に行つて宣教師になるのではないかと気が持ちがふと芽生えた時に、怖くなったと言います。宣教師になるという考えに捕らわれるのは「怖い」ことだったのです。その「恐怖」の件をまず紹介します。

「けれども恐怖はアンドリュウの心を襲つた。もし神様が自分を招き給うたならば？ 急に口のなかが乾いて、食物が咽を通らなくなつた」

（深澤正策訳『戦える使徒』ダヴィッド社 一九五二年 以下、引用はすべて同じ）

宣教師になることは、自分の意思ではなく、「神様が招き給う」ことだったので。ですから、招かれたらどうしよう、招かれたくない、という気持ちがあつたことが分かります。実際彼はこの後、大学を出て神学校に進学し、志願して中国伝道に出かけることになるのですが、その自分の運命といえますか、その予感を感じた時の気持ちに怖かつた、というのです。ここところが私にとつてはとても印象的でした。恐怖という感情は人間的だし、それなら分かるな、と思ひました。それで、この恐

怖の件にいたる一節を少し長いですが読んで見ます。

「彼が海外伝道に神から招かれたというのは、次のような事情である。

そのとき、中国から戻ってきた宣教師がウエスト・ヴァージニア州ルイスバークの教会で、中国においての体験談を語った。十六歳だったアンドリウは、家族のものと一緒に前列の椅子に腰をかけて、中国伝道の危険と困難と、そうして絶望的な民衆にたいする福音の必要に耳を傾けた。しかし、聞いているうちに彼は恐ろしくなった。宣教師の顔を避けるつもりで、自分だけ先に急いで家に戻ったほど恐怖の念に打たれた。ところが彼の父が、その背の高い、痩せて凄惨な宣教師を晩の食事に招待して連れてきたので、彼も避けてばかりいるわけにはいかない。その食事の席上でずらりと顔をならべている男の子たちを眺めた宣教師は、彼の父に言った。

『こんなに子供さんが居なさるのじゃから、一人ぐらゐ、中国を救うために、ささげられてはどうじゃな』

誰も答えない。子供等の父は、すっかり驚いた。一年に一度か二度、海外から帰った宣教師の説教を聞く、晩食を御馳走する、それから馬車で次の教会まで送り届けるのは、甚宜しい。しかし、その宣教師に子供をやるのは、問題が違ふ」

この後、先ほど紹介した「けれども恐怖はアンドリウの心を襲った」が出てきます。

この例から分かるもう一つの話は、外国宣教師という職業は、まっとうな両親にとつてはなつて欲しくない職業であつたということだ。若い息子が若きゆえの理想に燃えて宣教師になることはあつて欲しくないことだつたのです。

中国から帰国した宣教師の提案があつた後、母親はこう言っています。

「食卓の一端に居る母親は、きつぱりと云つた。

『そのことを子供たちの頭に入れてたくありません』

宣教師は落着き払つて居る。

『神様が招き給う』

兵隊にとられることは徴兵制度があれば避け難いことですが、宣教師にとられるということも「神様が招き給う」のですから、場合によっては法律以上に逃れ難いことでもあつたのでしよう。まあ、時代精神とでも言う他はありません。

——当時、アメリカに広まっていた時代精神によって宣教師になるといふお話ですが、アンドリュウが実際中国に渡つた時、彼の行動を支えていた気持ちは何だつたのでしよう。

先ほど伝道の根拠となつたマタイの一節を紹介しましたが、伝道という行動を支えている目的もマタイにあります。「御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、

スペインとの国境に近い南フランスミディ・ピレネ地方のコンクにあるサント・フォア聖堂。その正面入り口を飾るティンパヌムに浮き彫りされた「最後の審判」。左に天国が、右に地獄が描かれている



全世界に宣べ伝えられる。それから、終わりが来る」。マタイ二四十四です。

終わりの日というのは、主が天から帰ってくる日です。有名な讚美歌が歌っている「主は来ませり」です。この日は、ペテロの手紙第二(三・十二)によれば「天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう」のだそうです。海外伝道を聖書から定義すれば、終わりの日を招来するための空間的にも時間的にも壮大な行動計画、ということになるでしょう。

——とてつもない計画ですね。

共産主義もそうですが、人間は観念だけでとんでもない行動が出来る動物ではないでしょうか。宣教師の行動を支えていた使命感について。パール・バックはこう書いています。「地獄の火は燃えている。信ぜざる悪人を焼くばかりでなく、更に恐るべきは、信仰を知らずして死ぬものをも焼くのである。世界の各地にいたり、信仰を知らざる者を救うために、声高く叫び、警告するのは既に救われたる靈魂として、なさねばならぬ焦眉の急務であった」。

——でも実に勝手な論理ですね。キリスト教の信者でなければ(仏教徒だったら)、地獄の炎で焼かれるわけですね。

確かに。でも論理の是非はともかく。パール・バックによれば「初期の宣教師たちは、何ものをも信ずることを知らぬ現代の人間に解し得ぬ信仰を持っていた」と言いますから、「既に救われたる靈魂」、つまり宣教師は、キリスト教を知らない無知な人々

が知らないままに地獄の炎で焼かれることから救い出すことが「焦眉の急務」だったので。そして改宗した人たちは、地獄から救われたことへの喜びからか、あるいは二度と地獄に落ちないためにそれこそ声を張りあげて讚美歌を歌ったでしょうね。

§15 讚美歌は簡単に受け入れられたのか

— アンドリュウのように志願してきた若者を海外伝道団が宣教師として海外に派遣した。彼らは地獄に落ちる魂を救うために昼夜たがわず働いた。その結果、讚美歌が広く普及することになった。ということでしたが、讚美歌が普及する以前には現地にはまた別の音楽という歌は当然ありましたよね。

もちろんそうですね。宣教師側から見れば土着の音楽、今日の言葉で言えば伝統音楽とか民族音楽という言葉で呼ばれている音楽ですね。

— 改宗するということもそうでしょうが、古くからある自分たちの音楽を讚美歌と簡単に交換してしまったのですか。

そこら辺りが重要なことですね。結論から言いますと、どうも簡単に交換したみたいですね。日本の場合でもわずか百年ばかり、二世代くらいで簡単に音楽がすっかり西洋化してしまっていますね。

— そのお陰で今私たちは讚美歌を聞いても少しも違和感を覚えませんが、百年前